

『欺かれた女』とホモ・セクシュアリティの問題 : トーマス・マンとゲーテの「晩年の恋」

福元, 圭太
九州大学言語文化部

<https://hdl.handle.net/2324/8098>

出版情報 : ゲーテ年鑑. 34, pp.157-174, 1992-10-01. 社団法人 日本ゲーテ協会
バージョン :
権利関係 :



『欺かれた女』とホモ・セクシュアリティの問題

——トーマス・マンとゲーテの「晩年の恋」——

福 元 圭 太

広く流布してきた家父長的トーマス・マン像、すなわち良妻賢母たるカーチャと才能ある子供たちに囲まれて、幸福とよんでもよい家庭生活を営んでいたという健康なトーマス・マン像は、一九七五年から始まった日記の刊行とともに、大幅な修正をせまられることとなった。周知のようにトーマス・マンにおけるセクシュアリティ、あるいはその男性側への嗜好のみを名づけるなら、ホモ・セクシュアリティの問題が急浮上してきたのである。あまり疑問視されなかった結婚も、実は選びとられた市民的生活形式にすぎず、エロスの共同体としてのそれという意味が希薄ではないかということも指摘されている(1)。

ドイツ語圏、英語圏ではマンのホモ・セクシュアリティという問題について、すでに多くの論文が書かれて

いる②。また日記からマンがホモ・セクシユアルであったことの「証拠」を探しだすことは容易である。しかしここではマンのこの傾向を心理学的・病理学的に「診断」することが目的ではない。またこの問題をスキャンダラスにとりあげて、トーマス・マンに対するある種の崇拜を批判する意図は全くない。そもそもホモ・セクシユアルであるということが特別な問題として取り沙汰されること自体が差別的・閉鎖的なことであり、事実への関心という学問的良心の観点からすれば、この問題になんらかの道德的価値判断を下すことは慎重に避けられてしかるべきであろう。問題は、作品を読む際にマンのホモ・セクシユアリティという事実をどの程度重視するか、すなわち個々の研究者が、作品外部にある作家の性生活が、ある作品の生成にどれほど関与していると判断するかということになる。

本稿ではマン最後の完成された作品となった、また研究史上きわめて冷遇されてきた短篇『欺かれた女』が考察の対象となる。一九五〇年の十二月二十六日に『クルル』の続稿にとりかかったマンが、それを中断してまで書いたこの作品を、ホモ・セクシユアリティという問題をふまえたうえで読みなおすことが主な目的である。一九五二年五月十四日に書き始められ、同年六月二十四日に亡命地アメリカを去って落ち着かない日々を再びヨーロッパで過ごしたマンが、五三年三月十八日に脱稿したこの小品『欺かれた女』が孕む問題を探ってみたい。

二

マンの美少年たちへの愛はアッシエンバハのタッジョーへの思いに最も顕在であるが、トニオのハンス・ハンゼンへの淡い恋情、カストルプのヒツペへの思い、アードリアン・レーヴァーキューンとルーディー・シユヴェ

ルトフェーガーとの関係などもマンのホモ・セクシュアル的傾向と体験の詩的再現であるといつてよいかなのよう
な記述が、一九五〇年七月十六日の日記に見受けられる。

わたしの愛の最初の対象であったアルミンはその若さ故に人に与える魔力を失ったあと、アルコール中毒に
なり、アフリカで死んだ。わたしの初期の詩は彼のためにあった。彼は『トニオ・クレীগー』のなかに生き
ている。ヴィルリは『魔の山』のなかに、パウルは『ファウストウス博士』のなかに生きている。わたしの彼
らへの情熱はすべてなんらかの拒絶にあった。わたしの愛に最もよく応えてくれたクラウス・Hに『アンフィ
トリオン論』の序文は捧げられている⁽³⁾。

ここには驚くべき率直さで、この四人の少年・青年たちへの愛情が、マンの作品やエッセイといかに大きな関
わりをもってきたかが語られている。しかし、四人ではなかった。公開された一九五〇年あたりの日記と最近の
研究によれば⁽⁴⁾、マンが思いを寄せた青年は五人であったことが明らかになった。一九五〇年の夏、チューリ
ヒでの出会いである。五〇年五月三日からヨーロッパに一時帰国していたマンは六月二十三日から七月十四日ま
で、チューリヒの「グラントホテル・ドルダー」に宿泊する。そこで働いていた若い給仕⁽⁵⁾、フランツ・ヴェ
スターマイアー (Franz Westemeier) がその青年であった。七月九日の日記は語る。

またもやこれだ、またもや愛してしまつた、一人の人間に心奪われ、その人に強く焦れる——二十五年来こ
んなことはなかった、そしてそれがもう一度わたしの身に起こることになっていたとは⁽⁶⁾。

二十五年前、正確には二十三年前の一九二七年、マンは例のクラウス・H、すなわちクラウス・ホイザーとデ
ュッセルドルフで出会い、相手からもそれなりの愛情を寄せられるという体験をしている。『欺かれた女』にと

とても重要なこの青年にはのちにもう一度言及することにして、チューリヒでのプラトニックな愛を綴った日記をもう少しめくってみよう。

世界的名声はわたしにとっては実を取るに足らないものだ。しかし彼の微笑み、彼の目の輝きに比べればそんなものは全く重みを持っていない。「……」彼もまたギャラリーに加えよう。どんな「文学史」もふれることのないであろう、クラウス・Hを越えて、いまは黄泉の国にいるパウルやヴィルリやアルミンにまでさかのぼるわたしのギャラリーにう。

「晩年の恋」といえばわたしたちはすぐにゲーテに思い当るが、その前にマンが同年の七月十五日から八月八日にかけて執筆した『ミケランジェロのエローティク』という論文を見ておく必要がある。マンはやはりゲーテ、そしてトルストイという名をあげながら(九―七八五)、ミケランジェロの場合も上の両者と同じく、その創造力の源泉が「愛」にあったことを指摘する。ミケランジェロ五十八歳のときのトマソ・カヴァリエリなる青年への恋、六十歳から十二年間続いた貴婦人ヴィットーリア・コロナとの恋(マンはこれをゲーテのシュタイン夫人への思いになぞらえている(九―七八九)、さらにミケランジェロ七十二歳でコロナが没したあとも、彼が何度も恋に落ちたことを驚嘆と称賛を以て語る。ミケランジェロが愛をいつも「災い、災厄、甘い毒」と思いながらも、それが「彼の創造力の基盤であり、彼の超男性的(übermännlich)なやほとんど超人的(übermenschlich)な作品のための、靈感を与える神的な力、原動機、燃えるような推進力」(九―七九二以下)であったと述べる。この論文でことさら強調されているのは、次の二点である。

まず、ミケランジェロの男女両性に対する恋愛の傾向。上の引用でも「超男性的」という用語には必然性が感

しられず、ことさらにいわゆるヘテロ的男性性を無化しようという意図が感じられる。またミケランジェロが「相手がまばゆいほど美しい青年であろうが、光り輝くほどの女性であろうが」（九一七八五）恋に落ちたこと、「男性性と女性性が彼には神的と思えるように調和した面立ちの人」（九一七九一）を愛したことが語られる。

また、それが年齢差のある恋、いや「晩年の恋」であつたということにマンの力点は置かれている。ミケランジェロのエロティクが「美しさと醜い老年との両極性に基づいていた」（九一七八八）こと、そして愛するのは常に老年の方であること、そしてそれが「神は愛する者の中にあり、愛される者のなかにはないという、まことにプラトンのな」（九一七八八）愛として正当化されていることである。

この論文の成立とマンのフランツ・ヴェスターマイヤーによる思いを無関係と見ることはできまい。かつてカール・クラウスは「男は仮借ない精神の闘いのなかでも、人に知られず、しばしば一人の女に花束を投げかけることができる。しかし、再読してみると、繊細な神経の持ち主には、その論争文が恋文にならないことが判明するのだ」⁽⁸⁾と喝破した。マンの場合それが「一人の女」ではなく、「一人の青年」だったのである。

ミケランジェロ論文でも盛んに引き合いにだされたゲーテの「晩年の恋」は「マリーエンバートの悲歌」という形で文学的昇華をみた。ゲーテ七十四歳、ウルリーケ十九歳である。周知のようにマンはゲーテのこの恋をモチーフにすでに作品をものしている。構想ではマリーエンバートのゲーテを描くことになっていた作品、『ヴェニスに死す』がそれである。「一個の魅力ある無邪気な生命に対する愛情によって、高位に昇った精神が威厳を失墜する」（十三—一四八）というモチーフで構想されたこの作品が『欺かれた女』と素材的に親近性を持っているのでは、という指摘は『欺かれた女』発表当時からあつた。マンはしかしこれをきっぱりと否定し、両作を比較することは愚かであり、重みからいってもテーマからいっても両作は全く別物であること、ただ共通のも

のがあるとするれば、それらが「わたしの作品、まさに間違いようがないほどわたしの作品であるということだけ」(十一―五二九)だとする。しかし一九五〇年七十五歳でミケランジェロ、ゲーテと同じように「晩年の恋」に落ち、七十八歳の誕生日を前に書き上げられた『欺かれた女』が『ヴェニスに死す』と「全く別物」というマンの発言、このマン独特の「作者による作品解説」に振り回されてはなるまい。少なくとも「まさに間違いようのないほど」マンの作品である『欺かれた女』の扱う素材が「晩年の恋」であることはここで確認されてよい。『デュッセルドルフに死す』と銘打ったハンス・マイヤーの『欺かれた女』論⁽⁹⁾にはヴェスターマイヤー体験の記述はまだないが、『ヴェニスに死す』をもじったかに思われるその表題は実に卓抜といえよう。

マン自身が自分の「晩年の恋」と思ったのは先にあげた一九二七年のクラウス・ホイザー体験であった。一九三四年五月六日の日記はホイザーとの幸福な体験を記している⁽¹⁰⁾。また三五年九月十四日には「ゲーテは七十を越えるまでエロスの力を持ち続けた――いつも女の子に対して」だが⁽¹¹⁾と、自分のホモ・セクシュアル的傾向を半ば揶揄している。マイヤーはこの体験が『欺かれた女』を規定しており、マンが小説の舞台をデュッセルドルフにしたのも、それがホイザーを知った町だから、としている⁽¹²⁾。またホイザーの父はかの地の芸術アカデミーの教授であったが、小説にそういう設定の人物が登場することから考えても(八―八七七)、マイヤーの主張は排除できない。ただ上にあげたように、ヴェスターマイヤー体験が「晩年の恋」を扱った『欺かれた女』に決定的な影響力を持ったということは、時期的に考えてもミケランジェロ論文の内容から考えても疑いえない。

三

一九五二年四月六日の朝、コーヒーを飲みながらカーチャ夫人がマンに語った「実話」がこの物語りを執筆する契機になった¹³。ある年配の夫人が息子の若い家庭教師にかなり年齢差のある恋をする。（作品では主人公のロザリーエ五十歳、家庭教師のケン・キートン二十四歳である。）恋の奇蹟か、すでに閉経を迎えていた夫人の生命の泉は再び溢れはじめ、若さと生命力の息吹が夫人の全身を充たす。しかし魘りと思われた血は実は子宮に巣くう癌の末期症状による出血だった。夫人は血まみれになって死へと赴く。これが『欺かれた女』のもとになった、カーチャ夫人が話したという「実話」である。

作品はこの「実話」に忠実に基づいている。女性の生理という一般的にはタブーに近いことから七十八歳の大作家がテーマに選んだことは、一見奇異の念を起こさせる。マン自身この作品を「女性には向かないある女性の物語」¹⁴と呼んでいるが、出版後の評判はたしかにはかばかしくなく、「老年の小さな駄作」¹⁵とも評された。注目すべきは、マンが執筆前にクライストを集中的に読んでおり¹⁶、この作品があつた『O侯爵夫人』と、一般的にはスキヤンダラスだとされることを正面からとりあげているという点で無関係ではないと思われることだ。マンは『欺かれた女』完成の翌年の一九五四年にクライスト論を書いているが、そこで『O侯爵夫人』の物語を淑女ならだれでも赤面せずには読めません。このような文の調子はいったいどんな結果をもたらすのでしょうか。』とクライストの読者からの手紙を引用し、「クライストが特にこういう女性たちを敵にまわしたというのは、自明のことであつた」（九一―八三九）と付け加えている。毀誉褒貶の激しかった『O侯爵夫人』をマンが最

終的には「この痛ましい、スキヤンダラスな題材を、これ以上の真摯さと品位をもって語ることは不可能だ」(九一八三八)と称揚するとき、同じ運命をたどった『欺かれた女』を、マン独特の、過去の偉大なものに自分をオーバーラップさせるというやりかたで弁護しているのだと解釈するのは、あまりに意地が悪いであらうか。

本題に戻ろう。前章の考察を経たうえで『欺かれた女』の主人公ロザリーエ・フォン・テュムラーの若いケンへの恋心を探るなら、当然ながら「果たしてロザリーエは女性であらうか」という疑問がわいてくる。ロザリーエは単に物語の機能上女性なのであって、本当は青年に恋する男性の老人、プラトニズムの実践者、ミケランジェロに代表されるエロスを作品の創造力の源とした芸術家、クラウス・ホイザーとの幸福な体験を回想し、ヴェスターマイヤーの微笑みに身を焦がすトーマス・マンその人なのではないか。マンの作品のなかで年上の「女性」が年下の美少年に愛を告白する場面はここだけではない。例えばパウル・エーレンベルク体験に規定されたヨゼフのムト分、そして『ファウストウス博士』でやはりパウルをモデルにしたルーディー・シユヴェルトフエーガーに恋するイーネス・ロッデは、ケンに恋するロザリーエという図式の相似形的先取りであったとは言えないか。複合的な性格を持った実在の女性というよりは、ナイヴィテートの戯画、道化者の亜種として、常に冷たいイロニーをもって描かれるロザリーエは、男性であるマン自身の変装した機能的人物、マンのなかの恋する老人の戯画的投影とするのが妥当ではないだろうか。なぜマンがこのような人物を設定し、残酷なやりかたでこの世から退場させたのかについては、次章で「死」との関連において考察したい。

四

『欺かれた女』という物語全体は、臨終の際にロザリーエがアンナに語る数行の台詞に向かって収斂していく。まさにこの終わりの数行をパースペクティブの起点として物語を逆照射すると、この物語に隠されていたものが何であつたかが浮きあがってくる。

アンナ、自然、自然の欺きや人を馬鹿にしたような残酷さを口にしてはだめよ。自然、自然の悪口を言つてはだめよ。わたしもそんなことはしなかったわ。辛いわ、——あなたたちや春のある人生から離れていくのは。でも死のないう春なんてきつとつまらないものでしょね。だつて死、というのは生きるためのひとつの大きな手段でしょね。死はわたしにとっては、復活と恋の喜びという姿であらわれたのだけれど、それは欺きではなくて善意だつたし恩寵だつたのよ。(八一九五〇 強調筆者)

自然、死、そして恩寵、この三者は前章で見たホモ・セクシュアリティという問題とどのようにに関わりあうのだろうか。

自然はヤヌスの顔よろしく、ロザリーエの好きな花や小鳥といった穏やかな側面と、子宮を破壊する病氣といった荒々しい側面の両面をもっている、といった常識的なことをマンが言いたかつたのではあるまい。第二次大戦を経験し、アードリアンに、そしてロザリーエの娘で抽象画家であるアンナに調和的芸術の不可能性を語らせた⑨マンがロザリーエの口を通じて、その一見パラダイスのな、植物図鑑顔負けに咲き乱れる花々を描写する

とき、それがリアリズム的な花の再現とは考えられないのである。例えばクロッカスとイヌサフラン、この春の花と秋の花が取り違えるほど酷似していることが語られるが（八―九三四）、これはロザリーエの回春と衰弱、始めと終わりの取り違え、すなわち「欺き」のアレゴリーの機能を担っているのだ。麝香の匂いのするほうへ行ってみると、そこには銀蠅のたかる糞や動物の腐った死骸が転がっていた、というエピソード（八―八八七）も、同様である。マンは目に見える花や鼻孔に入ってくる匂いといった外的自然を描きながら、実は別の自然、つまり内的自然、すなわちエロスの外界への投影を行なっていたのではあるまいか。他者たる外的自然が排除され、ひたすら内面のエロスの投影として外的自然が現前するということにこそ、ホモ・セクシュアルなエロスの特徴が表れているといえる。ホモ・セクシュアル、つまり同性愛は、自分と同じ性を愛すること、自分と似たものしか愛せないということ、自己愛、つまりナルシズムに極めて近い。他者の排除とその帰結としての自己内部の外的世界への投影、そこから来る自己の全能感といった、クルルのパン・エロティクにつながっていくナルシズムが『欺かれた女』の外的自然把握にも表われているのではないか。ロザリーエの手放しの自然崇拜はマンの内的自然としてのエロス崇拜、あのミケランジェロ論で称賛された、老いてなお衰えぬ創造力の源泉としてのエロス崇拜の変種であり、それは間接的にはホモ・セクシュアリティの擁護となっている。

しかしマンが、ロザリーエの自然崇拜を、度を越した滑稽なものとして描き、アンナにもそれを批判させ、結局のところ自然にその申し子ロザリーエを裏切らせて、残酷な死へと追いやったのはなぜか。これにはマンのエロスが持つある特性が一つのありうべき回答を与えてくれるであろう。生殖を伴う男女間のエロスですら、その絶頂にあつてはタナトスと境を接する。生殖を伴わず、性的に――道徳的価値判断は抜きにして――不毛たらざるをえないホモ・セクシュアリティ―は本来死へ傾斜しているとはいえまいか。ロザリーエの死は、彼女がマン

の死へ傾いたエロスの具現者である以上、避けられぬものとなる。すなわち、ロザリーエの死はマンのホモ・セクシュアリティに潜む死を肩代わりした、いわば代理死であるといえるのではないか。マンはロザリーエを死へと追いやって、エロスに伴う自分のなかの死への衝動から距離をとり、対象化し、自分を救済したのである。ロザリーエがことさら滑稽にイローニッシュに描かれているのは、マンがロザリーエのなかで自分自身を極端に戯画化して、自分から突き放していると考えられるのだ。ロザリーエの残酷な死は、マンにとって恋の受苦というマゾヒズムとともに「晩年の恋」という危機に陥った自己の徹底的否定という自己救済的サディズムの両方を満足させることのできる(20)唯一の方法だったのである。

エロスと死という観点でマリオ・シエネシーは『欺かれた女』とゲーテの『親和力』を比較し(21)、ロザリーエにおいてもオッティリーリにおいても道徳的禁止が自然力たるエロスを克服し、選びとられた死によって二人が浄化されるとしているが、はたしてそうであろうか。たしかにロザリーエの息子の名が、当時としては珍しいエデュアルトであることをマイヤーは指摘しているし(22)、ロザリーエとオッティリーエという名前が見事に韻を踏んでいるのも、出来すぎた偶然ではある。またロザリーエが死を迎える前に、ホルターホーフ離宮にケンたちと遠足に行くとき、マンはどうしても船でライン河の上を行かせたかったのだが、「水」が死への入り口になっていることも『親和力』と共通している。『ヴェニスに死す』でもそうであったように、水はアケローンと化する。しかし、ロザリーエとオッティリーエの死が同じ意味を担っているとは言えない、いやまるで正反対のことを言っているのではないか。ベンヤミンはオッティリーエの死に、和解とそれを超える救済の希望を見ているが(23)、マンの人物では『ファウストゥス博士』のアードリアンこそオッティリーエに相当する人なのであり(24)、ロザリーエは道徳的禁止を侵し、エロスに足をとられて、マンという魂だけは救っておいて、自らは死に赴くのであ

る。マンはかつて『親和力』を「自然と精神の両方と等しく同盟を結んだ詩人」の書いた「第三の王国」を実現する小説であり、そこでは「精神と感覚性が見事につりあっている」（十一―五六三）と絶賛した。ロザリーエの代理死がまさにマンのエロスのある種の犠牲であるなら、精神と感覚性のどちらか一方に加担せず、それを総合しようとする『親和力』を『欺かれた女』と同類視することはできない。むしろ道德的禁止を凌駕するエロスの横溢に戸惑うマンは、ゲーテの諦念的静謐からは大きく離れているのではないか。

しかしロザリーエを死の深淵へとひきずりこむエロス、この内的自然たるエロスはなんと呼ばれているであろうか。エロスが「復活と恋の喜び」という姿であらわれたことをロザリーエは「欺きではなく、善意だったし恩寵だった」と言う。「欺かれた女」ロザリーエはこの「欺き」を「恩寵」とするのである。

マンはこの物語を書き始めた当初、ロザリーエに自然を弁護させるつもりはなかった。自然に対する「苦々しい気持ちだけを吐露しよう」と考えていたのだ。この構想の変化についてマンはゲーテが平板な作品を読む際に言ったとされる「全体をもう少しばかり高尚にしなければならぬであろう」⁽²⁵⁾（強調マン）という言葉を決えず思い浮べていたという。

はたしてマンは物語を「少しばかり高尚に」するためだけに「恩寵」を語るのであるか。またもや「恩寵」である。「罪と恩寵についてわたしはいろいろなことを知っている、たいていの神学者よりもよく」⁽²⁶⁾と書くマンは、「恩寵」という概念とまさにきのう今日取り組んでいるのではない。『ファウストゥス博士』の「信仰を超える奇蹟」とは「恩寵」の意であり、カンタータ『ファウストゥス博士の嘆き』をしめくくる⁽²⁷⁾の音は「恩寵」(Gnade)の頭文字ととれるのだ。ツァイトブローームは破滅してゆくドイツと友人アードリアンに「恩寵」のあらんことを祈りつつ筆を置く。マンはさらに五年、『選ばれし人』という「恩寵譚」を語る。そして『欺か

れた女』も「恩寵」で閉じられるのだ。このようにマン後期の作品にあたかもデウス・エクス・マキナのごとく降臨し、解決を約束するかのような「恩寵」の概念にはしかし、特にキリスト教文化圏の外にいるわたしたちは、慎重に対処する必要があるだろう。

「恩寵」の概念は大きく三つに分類される。まず罪あるものへの宥し、慈悲としてのそれ (*misericordia*)、次に神に選ばれて天分、才能を与えられているという意味でのそれ (*clementia*)、そして最後に純粹にキリスト教神学的意味での、超自然的に人間の魂に吹きこむ神的力量としてのそれ (*gratia*) の三つである⁽²⁾。アードリアンにとつての「恩寵」は *misericordia* と呼ぶことができるであろう。選ばれし人、グレゴリウスの *clementia* を語る「物語の精神」の化身の名がクレメンス (*Clemens*) であることは、マンになじみの「名前遊び」であろうか。マンやカロッサがゲーテを繰り返し「寵児」と呼ぶとき、ゲーテはまさに *clementia* を一身に受けたものの謂なのである。

ではロザリーエにとつて「恩寵」とは何であったのか。それは死へと通じる自然なるエロスが「復活と恋の喜び」という姿であらわれるという「欺き」を指していた。この「恩寵」の送り手は、明らかに神という名では呼ばれていない。時代が下るにつれてキリスト教的神はその存在の自明性を失っていったが、第二次大戦を経験した、しかもニーチェの精神的直系にあたるマンにキリスト教的神の「恩寵」を望むことができたであろうか。

「欺き」を「恩寵」と解することができたのは、「恩寵」の送り手がいかなる神的力量であったかは本質的な問題ではなく、ただにその媒質がエロスであったからではないか。『ミケランジェロのエローティック』のなかでマンはこのフィレンツェの巨匠の詩について次のように書いている。

ミケランジェロの詩の大部分、いやそのほとんどが愛の歌だった「……」ミケランジェロが、世界が彼に与えた唯一の喜びとして称揚した「美しいかんばせの力」(La forza d'un bel viso)に対する永遠の感受性が、彼が呪いつつ、繰り返す愛の神の残酷さを嘆きつつも、生きたままで至上の境地へと自らを運んでくれるものとして恩寵と呼んだこの感受性が、われわれを深く感動させるのである「……」。(九一七八五 強調マン)

エロスに対する感受性こそミケランジェロにとつての「恩寵」であり、それを畏敬を以て語るマンにとつてもエロスこそがその芸術的創造力の源泉であつたと言えるであろう。しかしマンのエロスが死に傾いたホモ・セクシアルなものであり、しかも年齢差のある愛であることは、この「恩寵」が必ずしも幸福を約束しないことを語っている。これは「いったい正気の沙汰であろうか」。私はもう「穏和な品位ある身分になって、人生の静かな段階に達したはずではなかったか」。私の目は「男がこれだと思う若い女を見るように、あの男を見ているのだ——これは年齢のせいなのだ。私の老年と、あの男の若さのせいなのだ。若さは女性的で、若さに対する老年の関係は男性的なのだ。しかし老年の欲望は快活で自信のあるものではなくて、「……」若さに対して、全自然に対して、恥辱とためらいとに満ちたものなのだ」(八一九〇一以下)。これらはロザリーエの独白であるが、そう言わねばマンの独白といつても区別がつかないであろう。

一八二二年七月二十四日、マリーエンバートからエーガーへ向かう途上、ゲーテは『風の奏でる豎琴』という相聞歌のなかでウルリーケたる「彼女」に感情移入し、「雨をふらせなさい、すぐに新しい虹がでる／あなたは泣いているのですね、私はすぐに参ります」(28)と恋する男女の切ない思いを、老若の差を感じさせぬ詩句で歌っている。いわゆる『マリーエンバートの悲歌』は「神々は私を引き離し、私を深淵に落とした」(29)という哀切な別離を嘆く詩句で終わっているといえ、そこではウルリーケへの老詩人の思いは浄化されており、恋心は

「私たちの胸の清き場所に／より高き、清き、知られざるものへ／感謝の念をもって自ら身を捧げようという努力が被打つ」という諦念に至っている。神々のおわします時代に生きることのできたゲーテは、「晩年の恋」を「一聖書にあるがごとき―神の平安」に似た「敬虔である」(fromm sein)⁽³⁶⁾という感情へと浄化することができたのである。

一方マンは美しい若さと老年の結合を「キマイラの」と呼び、老年は少しばかりの『同情』と、善意と、恩寵しか期待しないという(九―七八八)。「恩寵」なるものは本来、超越的なものの存在を仮定していると考えられる。しかしマンが『欺かれた女』で語る「恩寵」には明らかに世俗化されたエロスの「愛の返答」という意味合いが強いのではないか。『欺かれた女』に関して本論で以上のように解釈してきたエロスは、男女の境界を無化しようとするアンドロギノスの・万物調和的な側面を全く持っていないとはいえないが、老若の溝を飛び越えようとする点では、キマイラの・分裂的なものであった。世界的名声をすでに獲得したマンが『クルル』の続稿を中断してまで『欺かれた女』を書かざるを得なかったのは、まさにこの自己内部にあるキマイラのエロスの深淵へ足を滑らせて転落することを回避せんがためではなかったか。

この作品の生成にマンのホモ・セクシュアリティの問題がいかに深く関わりあっていたかをこの小論が少しでも究明できたとすれば、論の目的は達せられた。

注

トーマス・マンの著作の底本としては左記のものを用い、本文中の引用にはその巻数とページを(九―五八七)のような形で示した。

- Mann, Thomas : *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*, Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt am Main 1990.
- (1) 田村和彦 : 「レーブス・メンと同性愛」、『論集レーブス・メン その文学の再検討のために』(クヴェレ会刊、一九九〇年)三三〇頁。
 - (2) Vgl. Härtle, Gerhard : *Männerweiblichkeit. Zur Homosexualität bei Klaus und Thomas Mann*. Athenäum, Frankfurt am Main 1988. S. 397 ff.
 - (3) Mann, Thomas : *Tagebücher 1949-1950*. Fischer Verlag, Frankfurt am Main 1991. S. 221.
 - (4) Northcote-Bade, James : „Noch einmal also dies“. In : Thomas Mann Jahrbuch Bd. 3. Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main 1990. S. 139 f.
 - (5) 給仕として働くクルルにギルマンノック卿なる人物が強く惹かれる。ところが『クルル』のエピソードはこれがもとになつたものかといふ問題がある(参見)。 (Vgl. Wysling, Hans : *Narzissmus und illusionäre Existenzform*. In : *Thomas-Mann-Studien V*. Francke Verlag. Bern 1982. S. 362.) また『異性ニ対しての一流ホテル内のレスト・インに出入する人々のヒステリーや狂言などについて』(新潮社『FOCUS (一九九二年)』号、五六頁以上)を参照。
 - (6) Mann, Thomas : *Tagebücher 1949-1950*. a.a.O., S. 213. (密蔵マン)
 - (7) Ebd. S. 215 f.
 - (8) Kraus, Karl : *Beim Wort genommen*. In : *Gesammelte Werke Bd. 3*. Kösel, München 1955 S. 32.
 - (9) Mayer, Hans : *Thomas Mann. Suhrkamp*, Frankfurt am Main 1983. S. 409 ff.
 - (10) Mann, Thomas : *Tagebücher 1933-1934*. Fischer Verlag, Frankfurt am Main 1977. S. 411.
 - (11) Mann, Thomas : *Tagebücher 1935-1936*. Fischer Verlag, Frankfurt am Main 1978. S. 174.
 - (12) Mayer, Hans : a.a.O., S. 417 ff.
 - (13) Vgl. Mendelssohn, Peter de : *Nachbemerkungen zu Thomas Mann 2*. Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt am Main 1982. S. 109.
 - (14) Dichter über ihre Dichtungen Bd. 14 / III, Thomas Mann Teil III. Hrsg. von Hans Wysling unter Mitwirkung von Marianne Fischer. Heinemann / S. Fischer, Passau 1981. S. 519. (Brief an Klaus Mampel am 28. 6. 1953).

- (15) Mendelssohn, Peter de : aa.O., S. 116.
- (16) Vgl. Ebd., S. 113.
- (17) Vgl. Anm. (10).
- (18) Vgl. Feuerlicht, Ignace : Thomas Mann und die Grenzen des Ich. Carl Winter Universitätsverlag, Heidelberg 1966, S. 149.
- (19) 例えばメンナは「自足的で調和的な絵は「もう誰も描けなくなつて」おり、「現代の芸術がそういう絵を許さない」
と書く(ハーハハ〇)。
- (20) Vgl. Paul Felder : 'Die Betrogene', „Unverkennbar von mir“, In : Thomas Mann Jahrbuch Bd. 3. (Siehe Anm. (4)) S. 135.
- (21) Szeneszy, Mario : Über Thomas Manns „Die Betrogene“. In : Deutsche Vierteljahrschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte. Stuttgart 1967. 40. Jahrgang, Heft 2. S. 241 ff.
- (22) Mayer, Hans : aa.O., S. 417.
- (23) Benjamin, Walter : Goethes Wahlverwandtschaften. In : Gesammelte Schriften. I-L. Suhrkamp, Frankfurt am Main 1974. S. 199 ff. 邦訳『ゲーテ 親和力』ヴァルター・ベンヤミン著作集第五巻。高木久雄訳、晶文社、一九七二年。一二二頁以下。
- (24) Vgl. Wißkirchen, Hans : Zeitgeschichte im Roman. In : Thomas-Mann-Studien IV. Francke Verlag, Bern 1986. S. 192 f.
- (25) Dichter über ihre Dichtungen. (Siehe Anm. (14)) S. 521. (Brief an Karl Kerényi am 27. 9. 1953).
- (26) Ebd., S. 404. (Brief an Wilhelm Kamm am 16. 10. 1951).
- (27) Gnadeの概念については、主にグリムの Deutsches Wörterbuch を参考にし、『羅独一独羅學術語彙辭典』(哲学書房、一九八九年)等を参照した。キリスト教用語関係の辞書類にもあったが、神学的に極めて難解な第三の概念gratia に関しては、深く立ち入るのを避けた。
- (28) Goethe, Johann Wolfgang von : Goethes Werke. Hamburger Ausgabe in vierzehn Bänden. Bd. 1. Gedichte und

Epen I. Verlag C. H. Beck, München 12. Aufl. 1981, S. 377.

(2) Ebd., S. 385.

(3) Ebd., S. 384.